コロナ禍の世界

ブラジル

「感染否定」ボルソナーロ大統領の崖っぷち

感染をネグレクトし続けるボルソナーロ大統領。見かねた州知事や市長が対策に乗り出したが、貧富の差や地域格差で感染は拡大の一途。財政赤字も膨らみ、政権基盤をも脅かしている。

朝日新聞サンパウロ支局長兼ハバナ支局長
岡田 玄
おかだ げん　二〇〇三年同志社大学大学院修士課程修了、朝日新聞社入社。西部報道センターなどで原爆、沖縄、外国人留学生労働者問題などを取材し、一八年より現職。アルゼンチン、キューバでスペイン語を学ぶ。著書に『ナガサキノート』、『チャイナスタンダード』（取材班として）。

ブラジルで確認された新型コロナウイルスの感染者数は五月一五日時点で二一万八二二三人、死者は八二二三人。いずれもラテンアメリカ最多で、米ジョンズ・ホプキンス大学の集計では、この時点で感染確認数、死者数とも世界で六番目の多さだ。今後、中南米での爆発的な感染拡大が警戒されており、地域大国のブラジルには感染抑止に向けたリーダーシップが求められるが、いま、それは期待できない。

原因はボルソナーロ大統領だ。新型コロナウイルスを「ちょっとした風邪だ」などと軽視し、「経済を破壊する」として外出自粛などの社会的隔離政策に反対する。商業施設などの営業停止を命じた州知事を「ヒステリーだ」と揶揄し、社会的隔離が必要だと主張した保健相も更迭した。市民には外出を勧め、店舗には営業の再開を求め、支持者には集会を催すよう促したのである。

集会に参加したり、大人数で写真を撮ったりする大統領の感染防止に逆行する姿勢には国民から批判が高まっている。外出自粛が始まった三月末以降、窓から鍋をたたいて抗議の意思を示す「パネラッソ」が頻繁に行われるようになった。サンパウロでも夜になると、家々の窓からカンカンカンと鍋をたたく甲高い音が響き、あちこちから「ボルソナーロはやめろ」という怒鳴り声が聞こえる日が続いた。

例年と変わらなかったカーニバル

今でこそ、野党やメディア、あるいは多くの市民が新型コロナウイルス対策をめぐりボルソナーロ氏を批判しているが、彼ら自身、早くから危機感を持っていたとは言いがたい。すでに中国で感染が拡大し、欧州でも感染者が確

認されていた二月下旬、ブラジル各地ではカーニバルが例年通り開かれ、リオデジャネイロだけでも国内外から二〇〇万人が訪れた。ブラジル人には「バカンスの期間だが外国旅行を止めよう」という動きもなく、数万人が欧州に旅行したが、空港の検疫体制は何も変わらなかった。

二月二六日、ブラジル初の陽性確認はイタリアから帰ったサンパウロ在住者だった。これを皮切りに欧州帰国者からの感染確認が相次いだ。それでも水際対策はほとんど動かず、唯一、社会主義的政策の失敗から深刻な経済危機に陥り、医療体制が崩壊しているベネズエラとの国境が封鎖された。この時点でベネズエラでは新型ウイルスの感染は確認されておらず、「反左翼」を公言するボルソナーロ氏が自身の信条を優先させたと言える。結局、ペルーやアルゼンチンなどの周辺国が陸路の国境を封鎖し、ブラジルの方が「隔離」された。ブラジルの本格的な入国規制は三月二七日まで待たねばならなかった。

地方政府が進める医療対策

政権内にも危機感を持っている人物はいた。三月二〇日に「現状のままでは四月中に医療崩壊が起きる」と述べたマンデッタ保健相（当時）だ。この翌日、ブラジル全土の感染者数は一〇〇〇人を超えた。

医師出身のマンデッタ氏は毎夕の記者会見で、統計や医学知識に基づいて理路整然と説明し、国民からの信頼を得た。四月上旬の世論調査では、マンデッタ氏の支持率は七六％に達し、三三％のボルソナーロ氏の倍以上だった。閣僚にも社会的隔離の必要性を訴えるマンデッタ氏を支持する者は多く、孤立したボルソナーロ氏は、「マンデッタ氏が謙虚さを失った」などと述べ、四月一六日に更迭した。後任には、医師で保健省前顧問のネルソン・タイシ氏が就いた。だが、やはり社会的隔離などをめぐりボルソナーロ氏と対立し、五月一五日に辞任した。

政権内の足並みがそろわない中、具体的な対策に動いたのは、サンパウロやリオデジャネイロなどの州知事や大都市の市長だった。

例えば、サンパウロ州では三月一七日に非常事態を宣言し、州内の学校を閉鎖し、二四日以降は商業施設などの営業停止を命令した。連邦政府ほどの強い権限は持たないが、事実上の「外出自粛」を市民に求めたのである。また、病床不足を解消するため、スタジアムなどにテントで野戦病院がつくられた。

州知事間の連携で、外出自粛要請は全土に広がった。し

かし、財政規模が小さく、医療インフラも脆弱な北東部やアマゾンなどの地域では、十分な準備ができないまま感染拡大が進み、病床の不足から医療崩壊が起きつつある。五月に入り、一部では都市封鎖も始まった。

地域格差に加え、貧富の差も、医療などの対策に影響を与えている。

ブラジルには、すべての人が無料で使えるが貧弱な設備の公的医療機関と、高額だが高水準の私立病院という、二つの医療システムがある。サンパウロ市の有名私立病院に勤務する医師によると、ウイルスの流入当初は、富裕層が使う私立病院に患者が集中したが、外出自粛開始から一ヵ月が過ぎた四月末の段階で、こうした病院では病床に余裕が生まれ始めているという。

一方、貧困エリアでは感染拡大が止まらない。サンパウロ市が発表した統計では、ファベーラと呼ばれるスラム街のある地区では、人口当たりの感染者の割合が高かった。主に貧困層が利用する公的医療機関では、以前から指摘されていた設備やキャパシティの問題が改善されないまま、新型ウイルス患者を受け入れている。病床数が比較的多い大都市の公立病院でも限界が近づきつつある。

また、公立病院では、症状があっても機材や人材が足りずPCR検査ができないと語る医師もいる。研究者グループの試算では、実際には公表値の一二～一五倍の感染者がいる可能性があるという。

経済対策で膨らむ財政赤字

ブラジル統計院によると、貧困層は全人口のおよそ四分の一で、五〇〇〇万人を超える。ファベーラは衛生環境も悪く、水道や電気さえない家もある。狭い家屋に大家族が暮らし、ある住民は「一人が感染すれば、家族全員に伝染する」と心配そうに話した。

貧困層にとって、もう一つの問題が失業だ。家政婦などインフォーマルセクターの割合が高く、感染を恐れた雇い主に解雇され、収入を絶たれた人も少なくない。逆に、感染した富裕層の家で働き続けた家政婦が感染し死亡した例もある。働けずに死ぬか、働いて死ぬか。「金持ちが持ち込んだ病気で、貧者が死ぬ」と言われている。

ボルソナーロ氏が社会的隔離を批判する背景に、先進国とは比較にならない貧富の差が存在することは無視すべきではないだろう。失業の増加は、治安悪化に直結することも忘れてはならない。

政権は四月半ば、失業した非正規雇用世帯に対し、世帯

二人まで月額最大一二〇〇レアル（約二万四〇〇〇円）を計三ヵ月支給することを決めた。また、経営が困難になった中小企業の資金支援として五〇億レアル（約一〇〇〇億円）を用意。五月には国会で「戦時予算」が承認され、緊急経済対策は総額で一兆レアル（約二〇兆円）を超す。

しかし、株価と通貨の下落は止まらない。一月中旬から三月二〇日までに、ブラジル主要株式指標ボベスパは五〇％以上も下げた。年初に一ドル＝四レアルほどだった通貨レアルも最安値を更新し、三月中旬には一ドル＝五レアルを突破。五月一五日には五・八レアル台で取引されている。緊急経済対策の手は打ったものの、財源となる過去最大規模の赤字国債が財政を行き詰まらせる恐れもあり、不安要因になっている。

続く過激発言、ささやかれる弾劾

四月下旬、死者が五〇〇〇人を超えたことを問われたボルソナーロ氏は「それがどうした？　私はメシア（ミドルネームで「救世主」の意）だが、奇跡は起こせない」と言い、不評を買った。こうした無責任な発言の数々に起因する政治混乱も経済にマイナスの影響を与えていると指摘されている。

ボルソナーロ氏は、二〇一八年の大統領選期間中からツイッターなどのＳＮＳを駆使して過激な発言を続け、「ブラジルのトランプ」とも呼ばれた。今回の一連の発言や行動も、過激さを好む支持者向けという見方もできる。科学的な知見を否定するのは、関係の深いキリスト教福音派の影響だと指摘する識者もいる。

実はボルソナーロ氏自身が感染したが無症状だったため軽視するのではないか、との見方も根強い。裁判所の命令で、「陰性」の検査結果を開示したが、「陽性疑惑」は払拭されていない。

ボルソナーロ氏は、州の外出自粛要請を無効にする大統領令を出そうとするなど強権的な姿勢を強めているが、国会や最高裁がブレーキをかけている。軍事独裁政権を礼賛してきた大統領を前に、図らずも地方分権と三権分立が機能していることを証明したとも言える。

支持者を前にクーデターの可能性に言及するなどボルソナーロ氏の発言はさらに過激さを増している。マンデッタ保健相解任後は、政権の看板だった法相が辞任した。議会内では大統領の弾劾に向けた動きもある。感染拡大に歯止めがかからず、地域の「リスク」になりつつあるが、政治の混迷はさらに深まる兆しを見せている。●